

日本音楽知覚認知学会投稿規定

平成 7 年 5 月制定
平成 8 年 11 月改定
平成 9 年 11 月改定
平成 15 年 11 月改定
平成 18 年 6 月 16 日改定
平成 24 年 6 月 17 日改定
平成 24 年 11 月 10 日改定
平成 27 年 12 月 28 日改定
平成 31 年 3 月 27 日改定

1. 学会誌の名称と内容

日本音楽知覚認知学会は、学会誌として学術研究雑誌「音楽知覚認知研究 (Journal of Music Perception and Cognition)」を刊行する。「音楽知覚認知研究」には、論文、寄書、展望、解説等を掲載し、使用言語は日本語または英語とする。

2. 原稿の種別

2.1 投稿原稿。投稿による原稿の種別は、以下の 4 種類である。

2.1.1 原著論文 (Original Paper) : 音楽知覚認知に関する研究の論文で、その内容が学術上、有意義であるもの。

2.1.2 評論論文 (Review Article) : 音楽知覚認知に関する特定の問題についての評論。

2.1.3 資料論文 (Short Report) : 試験的報告、内外諸研究の追試的検討、新しい方法の提案など。

2.1.4 寄書 (Letter to the Editor) : 研究速報、討論、提案、学会に対する意見など。

2.2 依頼原稿。編集委員会からの依頼による原稿の種別は、以下の 3 種類である。

2.2.1 展望 (Invited Review) : 特定の分野の進歩に関して広い角度から文献を引用して記述したもの。

2.2.2 解説 (Tutorial) : 特定の主題について、専門外の者にも分かり易く解説したもの。

2.2.3 その他 : 国際会議参加報告 (Meetings), 書評 (Book Reviews) など。

3. 二重投稿の禁止

原著論文、評論論文、資料論文、寄書は、既に「音楽知覚認知研究」及び他学会誌等に発表されたもの、発表されることになっているもの、あるいは投稿中のものであってはな

らない。ただし、寄書に発表した内容を充実させて原著論文、評論論文、資料論文として投稿することができる。

4. 原稿の長さについて

4.1 原稿の刷り上がりページ数は、原則として次のとおりとする。

原著論文、評論論文、展望、解説：刷り上がり 12 ページ以内

資料論文：刷り上がり 8 ページ以内

寄書：刷り上がり 4 ページ以内

その他：その都度指定する。

なお、刷り上がり 1 ページの字数は、日本語の場合概ね 1,400 字、英語の場合概ね 800 語を目安とする。

4.2 編集委員会の判断により、上記の制限を超過した原稿の掲載を認める場合がある。ただし、制限を超過したページに対して、著者に超過負担金を求めることがある。

5. 原稿の投稿について

5.1 原稿の内容について

掲載される原稿の内容は、未公刊のものに限る。

5.2 投稿者の資格

5.2.1 投稿者は、論文投稿の時点において本学会会員であることが必要である。

ただし、編集委員会が認めた場合はその限りではない。また、連名者も会員であることが望ましい。

5.3 日本語原稿の執筆要項

5.3.1 一般的事項

5.3.1.1 原則としてワープロ等を用いて原稿を作成する。A4 判の縦長の用紙設定とし、印刷する場合は片面に印字する。余白を十分に空けること（すべての余白を 25 mm 以上とし、特に左側は 35 mm 以上、空ける）。フォントサイズは 10 ポイントから 12 ポイント程度とする。本文だけでなく、要旨、表、説明文、文献、脚注、付録を含めて、すべてをダブルスペースで（一行ずつ空けて）鮮明に印字する。見出し、方程式や公式の上下には、さらに広いスペースを空けておく。日本語の場合、1 行あたりの文字数は 35 文字程度、ページあたりの行数は 17 行程度とし、ページあたりの文字数が 600 文字程度となるように印字する。原稿が読みやすく、査読者が紙面でコメントをする際を考慮して書き込みのできるスペースが確保されているかどうかには留意すること。原稿が読みにくい場合には、再提出を求める。

5.3.1.2 ワープロ等を用いる場合、機種依存文字の使用を避ける。機種依存文字とは、特殊な記号や、複数の要素を全角の中に詰め込んだような文字、および半角カタカナである。ウムラウトやアクセント記号の付いた文字を使う場合については日本語フォントを使用しないように注意する（半角英数ということは必ずしも英語フォントであることを意味しないので注意）。全角では、罫線素片（文字扱いされる罫線）、ローマ数字、丸や括弧で囲まれた数字、単位を表す記号、特殊な数学記号、括弧などと組み合わせられた記号（株式会社、財団法人などを表す記号が代表的）、商標権や著作権を表す記号などが機種依存文字である。これらは機種やフォントによって独自のコードが用いられているので、他の機種では利用することができず、文字化けや異常な動作の原因となる。ローマ数字や、複数の要素が組み合わせられたものは、半角英数字の組み合わせによって表現すれば、この問題から逃れられる。

使用を避けるべき機種依存文字の例。

罫線素片：— | 「」

全角の囲み数字など：①②③…⑱⑳，(1)(2)(3)…(19)(20)，**①②③…⑨**，1.2…9.

全角のローマ数字：I II III…VIII IX…，i ii iii…viii ix…

全角の囲み文字：(a)(b)(c)…(y)(z)，(日)(月)(火)…(土)(祝)，(代)(株)(財)(社)，ⒺⒻⒼ，など

全角に詰め込まれた単位など：mm mm² Hz ミリ キン 錠 など

特殊な記号など：No. KK ☎ © ™ など

半角のカタカナ：アイェオ…

5.3.1.3 文章は横書き、現代仮名遣いにより、「である」体で書く。読点は「、」（カンマ）を、句点は「。」（マル）を用いる。各段落の先頭行は、1 文字分のスペースを空けてから書き始める。原則として、数字はアラビア数字、単位は SI 単位系を用いること。

5.3.1.4 表紙を第 1 ページとしたページ番号を、原稿全体を通して用紙の右上につける（図、表はのぞく）。表紙以外のページには、上部左側に、第 1 著者名と省略表題を記載する。

5.3.1.5 原著論文、評論論文、資料論文、展望、解説の場合、原稿は表紙、日本語要旨、英語要旨、本文、謝辞、文献、脚注、付録、表、図・写真の表題および説明文、図・写真の順で構成すること。これらの構成要素は、それぞれ、新しいページから開始すること。

5.3.1.6 寄書の場合、原稿は表紙、本文、謝辞、文献、表、図・写真の表題および説明文、図・写真の順で構成すること。これらの構成要素は、それぞれ、新しいページから開始すること。

5.3.1.7 英語での投稿の際は、できる限り英語を母語とする者によるチェックを受けること。

5.3.1.8 英語の原稿では、各段落の先頭行は 5 文字分ほどスペースを空ける（この際、ソフトウェア上の書式設定において段落の 1 行目にぶら下がり設定を行うこと、またはタブによるスペースを挿入することが望ましい）。行末のハイフネーションは、マニュアルでする必要は無い（ソフトウェアが自動的にハイフネーションをする場合はわざわざ外さずともよい）。

5.3.2 表紙

5.3.2.1 原稿の種別，表題，省略表題，著者全員の氏名，所属，連絡先（電子メールアドレス）を，日本語および英語で記載する。

5.3.2.2 原稿の第1著者と，通信担当著者が異なる場合は（校正刷りの送付先，別刷りの請求先を含む），その旨を明記し，通信担当著者の姓名と住所を指定する。

5.3.3 日本語要旨

5.3.3.1 原著論文，評論論文，資料論文，展望，解説の場合，内容を簡潔に表した日本語要旨（300字以内）および日本語キーワード（5個程度）をつける。要旨には，本文中の図表は引用しない。また，論文の引用も極力，避ける。

5.3.3.2 表題，著者名，所属を頭書する。

5.3.3.3 寄書の場合，日本語要旨は不要。

5.3.4 英語要旨

5.3.4.1 原著論文，評論論文，資料論文，展望，解説の場合，内容を簡潔に表した英語要旨（200語以内）および英語キーワード（5個程度）をつける。要旨には，本文中の図表は引用しない。また，論文の引用も極力，避ける。

5.3.4.2 表題，著者名，所属を英語で頭書する。

5.3.4.3 寄書の場合，英語要旨は不要。

5.3.5 本文

5.3.5.1 図，写真，表の挿入位置を明記する。

5.3.5.2 本文中の文献の引用や文献リストの形式は，繰り返しになるが APA 準拠である。有償ソフトウェアではあるが，EndNote などを使用して APA 形式に変換すれば，煩雑な書式の統一化作業が効率的にできる。念のために，形式の例を記すと以下のようになる。

5.3.5.3 本文中の引用の場合，著者が1名であれば，毎回の引用ごとに次のように記載する。

…Deutsch (1999) が指摘するように…

…ことが明らかになった (Sloboda, 1985)。

著者が2名までの場合は，毎回，次のように記載する。

…Houtsma and Goldstein (1972) によれば…

…ことが示されたが (Houtsma & Goldstein, 1972; Ohgushi, 1983)，…

…奥宮，大串 (1997) の実験では…

…一つの要因としてあげられる (奥宮，大串, 1997)。

著者が3名以上5名以下の場合は，初回の引用のみ全著者の姓を記載するが，2回目

以降は第1 著者の姓のみを記載し、第2 著者以降は “et al.” または「ら」を用いて省略する。著者が6 名以上の場合は、初回の引用から第1 著者の姓のみを記載し、第2 著者以降は “et al.” または「ら」を用いて省略する（ただし、文献リストには最初の6 名の著者名までを記載し、それ以降の著者名を同様のやり方で省略する）。アナログレコード、コンパクトディスク (CD)なども文献として扱い、作者名と年号およびトラック番号を記載する。

… (荒川, 水浪, 桑野, 難波, 1995)。荒川ら (1995) の研究では…

…Iwamiya, Nakajima, Ueda, Kawahara, and Takada (2003) が行った。この過程において, Iwamiya et al. (2003) は…

…エルガーの第2 交響曲の第2 楽章を使用した (Elgar, 1911, CD 2, track 2)。

いずれも詳細はAPA *Publication Manual* (American Psychological Association, 2001) の該当箇所に準拠する。

5.3.5.4 文献リストは、本文の最後にまとめる。著者名のアルファベット順に並べる。文献の著者名は6 名まで全員の氏名を記載する。アナログレコード、コンパクトディスク (CD) なども文献リストに記載する。下記の記載例を参照すること。なお、例はシングルスペースで記載されているが、提出原稿ではダブルスペースで記載すること。詳細はAPA *Publication Manual* (American Psychological Association, 2001) の該当箇所に準拠する。

文献

American Psychological Association. (2001). *Publication manual of the American Psychological Association* (5th ed.). Washington, DC: Author.

荒川恵子, 水浪田鶴, 桑野園子, 難波精一郎 (1995). 音楽演奏の聴取最適レベルを決定する要因. *音楽知覚認知研究*, 1, 33-42.

Deutsch, D. (1999). Grouping mechanisms in music. In D. Deutsch (Ed.), *The psychology of music* (2nd ed., pp. 299-348). New York: Academic Press.

Elgar, E. (1911). Symphony no. 2 in E flat, Op 63 [Recorded by C. Davis & London Symphony Orchestra]. On *Elgar, symphonies nos 1-3* [CD]. Barbican, London: LSO Live. (2001)

Houtsma, A. J. M. & Goldstein, J. L. (1972). The central origin of the pitch of pure tones: Evidence from musical interval recognition. *Journal of the Acoustical Society of America*, 51, 520-529.

Iwamiya, S., Nakajima, Y., Ueda, K., Kawahara, K., & Takada, M. (2003). Technical listening training: Improvement of sound sensitivity for acoustic engineers and sound designers. *Acoustical Science and Technology*, 24, 27-31.

村尾忠廣 (1987). 楽曲分析における認知. 波多野誼余夫編, 音楽と認知 (pp. 1-40). 東京

大学出版会.

Ohgushi, K. (1983). The origin of tonality and a possible explanation of the octave enlargement phenomenon. *Journal of the Acoustical Society of America*, 73, 1694-1700.

奥宮陽子, 大串健吾 (1997). 旋律の記憶難易度を規定する要因: 絶対音感保有者の場合. 日本音響学会誌, 53, 698-705.

Sloboda, J. A. (1985). The musical mind: *The cognitive psychology of music*. Oxford: Oxford University Press.

梅本堯夫 (1966). 音楽心理学. 誠心書房.

5.3.5.5 脚注はなるべく使用を避ける。寄書には原則として本文における脚注の使用を認めない。脚注を使用する場合は、本文中の脚注を付ける箇所に上付で 1, 2, 3,... のように通し番号を付け、本文の末尾に新しいページを起こして脚注の原稿をまとめる。脚注の原稿は通し番号ごとに一つの段落にまとめ、簡潔に記述する。

5.3.6 図・写真の表題および説明文

図・写真には、図 1, 図 2 または Figure 1, Figure 2 のように通し番号を付け、それぞれの番号ごとに表題、説明文を作成し、図・写真とは別の紙にまとめて記述する。英語であることが望ましい。

5.3.7 図

5.3.7.1 図は、原則として 作図、楽譜作成用のアプリケーションソフトウェアで作成し、EPSF(Encapsulated PostScript File)形式のものを用意する。手描きでの作成が避けられない場合は、スキャンなどをして取り込む。

5.3.7.2 図は、原則として、刷り上がり時のイメージの大きさを作成する。採録決定後に版組をして刷り上がりのイメージを見た上で調整を求めることがありうるので、後から大きさの変更が容易であるように留意して用意することが推奨される。

5.3.7.3 図中の文字は、原則として 14 ポイント (天地: 大文字 4 mm, 小文字 3 mm) の大きさとする。英語であることが望ましい。

5.3.7.4 カラー印刷を必要とする場合は、そのために生じた費用の負担を著者に求める場合がある。

5.3.7.5 楽譜も図として扱い、図としての通し番号を付ける。

5.3.8 写真などの画像

5.3.8.1 写真の画質は最低でも刷り上がりイメージで 300 dpi 以上を確保することを推奨する。ただし、査読過程においては写真等を含めた PDF (Portable Document Format) フ

ファイルの容量が電子メールでの添付書類として送付可能なように容量調整を行うことも一方で推奨する。(その場合は、査読を実施する上で支障とならない品質の確保を著者の責任においてされたい。)

5.3.9 表

5.3.9.1 表は、一つの表につき、A4判の用紙を用い、別を書く。

5.3.9.2 折り込みとなるような大きさの表は、不可とする。

5.3.9.3 縦横の罫線は、なるべく少なくする。

5.3.9.4 表の番号は、表 1、表 2、または Table 1、Table 2 のように通し番号にする。

5.3.9.5 表の番号、表題、説明文は、表の上を書く。

5.3.9.6 表題、説明文、表中の文字は、英語であることが望ましい。

5.4 英語原稿の執筆要項

APA *Publication Manual* (American Psychological Association, 2001) に準拠する。原稿の種別に応じた、必要とされる構成要素は、日本語原稿の場合に準ずる。なお、原著論文、評論論文、資料論文、展望、解説の場合、日本語要旨は不要であるが、編集の便宜を図るため、日本語原稿の場合に準じて付けてもよい。

5.5 原稿の提出について

投稿原稿は、付記に定める本学会編集局の電子メールアドレスまで原則として PDF 形式¹の添付書類として送ること (MS ワード等のファイルは編集局での取扱の際などにオリジナルと異なるものとしてしまう危険性がありうるので避けられたい)。サイズの制限などによって添付としての取扱が困難な場合は zip 形式による圧縮をかけるか、あるいはクラウド上のファイル配送システムなどの利用によって、各投稿者で対処されたい。

6. 投稿原稿の採否

6.1 投稿原稿は、編集委員長を中心とした編集委員会によって審査され、その掲載の可否が決定される。なお、編集委員以外の会員に審査協力を依頼することがある。

6.2 審査の結果、原稿に修正を求められることがある。修正を必要とする場合、著者に審査結果を連絡後、2 ヶ月を経過しても修正された原稿が提出されない場合は、原則として受稿の登録を取り消す。なお、内容が大幅に修正された場合は、修正原稿が提出された

¹ MS ワードによる PDF の作成は、Windows OS の場合「別名で保存…」として、保存形式から「PDF」を選択すれば良い。Mac OS の場合、「プリント…」から「PDF として保存」のオプションを選択する。TeX のばあいは *dvipdfm* というフリーウェアが一般的である。PDF の形式によっては、出来上がった中身のテキスト部分がテキストとしてコピー&ペーストができないものとなることがある。査読過程の効率化のためにもできる限り、テキストとしての取扱ができる形式での PDF 化されたい。

年月日を、その論文原稿の受稿年月日とする。

6.3 編集委員長は、論文等の採録が決定次第、速やかに著者にその旨を通知する。

7. 採録通知後の最終提出物

採録時には、著者は最終原稿の文字情報を PDF および Word、さらにテキストファイル各 1 部にて編集局に提出する。さらに、画像データの電子ファイルを同時に提出する。

7.1 電子ファイル

7.1.1 表紙、日本語要旨、英語要旨、本文、謝辞、文献、脚注、付録、図・写真の表題および説明文の文字情報のみを、シフト JIS コードを用い、テキストファイルとして提出する。あるいは、Microsoft 社の Word 形式のファイルで提出してもよいが、図や表のデータは Word ファイルに埋め込まないこと。複雑な式も、テキストファイル、あるいは Word ファイルに入れる必要はない。

7.1.2 表の文字情報は、同じ行内の各要素をタブで区切った、テキストファイルとして提出する。あるいは、Microsoft 社の Excel 形式のファイルとして提出してもよい。

7.1.3 図は、以下の条件を満たした PDF ファイルを提出できる場合のみ、電子ファイルを提出する。(1) 原寸出力で 350 dpi 以上の解像度を確保できること。(2) フォントは埋め込みにすること。条件を満たす PDF ファイルを提出できない場合は、ハードコピーのみを提出する。

7.1.4 デジタル写真などのデジタル画像は、以下の条件を満たす PDF ファイルまたは JPG ファイルのいずれかを提出できる場合のみ、電子ファイルを提出する。(1) 原寸出力で 350 dpi 以上の解像度を確保できること。(2) JPG の場合、低圧縮（高品質）のものが望ましい。条件を満たす電子ファイルを提出できない場合は、ハードコピーのみを提出する。

7.2 最終原稿 PDF を添付書類として送る際のその他の電子ファイル

7.2.1 必要なテキストファイル、Excel 形式の表ファイル、図の PDF、写真の JPG などは、できるだけ zip 形式などで一括して電子メールの添付書類として送付する。ただ、容量制限等で添付困難な場合は、分割送付をすることは妨げない。

8. 著者校正

8.1 初校のみ著者が校正を行う。校正刷りが到着後、誤記、脱落などに充分、注意を払って校正を行い、指定された期日までに必ず返送すること。

8.2 校正の際には、採録決定時の内容、表現などをいっさい変更してはならない。

9. 投稿料および別刷りの購入について

投稿料は特に徴収しない。著者が別刷りを必要とする場合は、50部単位で注文を受け付ける。別刷りの購入代金は、部数が50部の場合、1ページあたり60円、100部以上の場合、1ページあたり50円とする。たとえば、1編10ページの論文別刷りを50部、注文した場合、代金は30,000円となり、100部なら50,000円となる。

10. 著作権について

掲載された論文等の著作権は、日本音楽知覚認知学会に帰属する。ただし、著者自身が論文を翻訳し、転載するなどの形で利用することは、初出を明確に示す限り差し支えない。

11. 最新の投稿規定について

論文の投稿に際しては、最新の投稿規定を参照すること。現時点での最新の投稿規定は、音楽知覚認知学会のWebページで公開されている。

付記： 現編集長の住所および連絡先メールアドレスは、以下の通りである。

住所：〒265-8501 千葉市若葉区御成台4-1

東京情報大学 総合情報学科

西村明 気付

「音楽知覚認知研究」編集事務局

連絡先メールアドレス：[jsmpc.editor@gmail.com](mailto:jsmpec.editor@gmail.com)